

“The Unploughed Patch” 一創造の否定

宮内 妃 奈

1920年代後半から30年代初頭にかけて、William March は南部アラバマを舞台とする短編を多数執筆している。中でも“*The Little Wife*” (1928年作)¹ は有名であるが、“*Miss Daisy*” (1930年作)²、“*Mist on the Meadow*” (1930年作)³、“*A Shop in St. Louis, Missouri*” (1931年作)⁴、“*Happy Jack*” (1931年作)⁵、“*The Unploughed Patch*” (1931年作)⁶など、それぞれに、宗教、人種、家族といった興味深いテーマを扱った作品が生み出されている。マーチは、デビュー長編が第一次世界大戦に従軍した海兵隊員たちを描いた *Company K* であったことから、戦争小説作家のイメージが強い。しかし、実際は、同時代の作家 William Faulkner と比較して論じられるほどの、南部を代表する作家の一人である。1943年、Stanley E. Hyman は *New Republic* において“Alabama Faulkner” というタイトルの書評を書き、マーチの作品をフォークナーに匹敵するものとして評価し、Alistair Cooke は、“William March is a whole ionosphere above Faulkner and is still the unrecognized genius of our time.”⁷と評している。本格的なマーチ研究は、主に70年代から80年代にかけて二人の研究家、Roy S. Simmonds と William T. Going によって行われているが、それ以降、代表的な研究家は現れず、“the most underrated of all contemporary writers of fiction”⁸というクックの表現は、今なお作家ウィリアム・マーチに対して当てはまるものであるだろう。本論では、彼の比較的初期の南部作品“*The Unploughed Patch*”を紹介するとともに、そこに表れている南部性について考察する。

“*The Unploughed Patch*” は1936年の秋に発表された三作目の長編、*The Tallons* の基になった作品である。短編も長編もどちらも全く無名であるが、概要は“it is nothing more nor less than the age-old legend of the eternal triangle”⁹とシモンズが述べるように、男女の「三角関係」を描いた物語で

ある。登場人物の名前や設定に多少の違いはあるものの話の内容はほぼ変わらず、評価は短編の方が高い。¹⁰シモンズは、特に長編と短編の結末の違いに注目し、短編の方がより“the reader's imagination”を誘発すると述べ、¹¹短編の持つ凝縮性が解釈の許容性を生み、物語の質を高めていることを示唆している。さらに、シモンズもゴーイングも指摘していないが、両作品の根本的な違いは語りの時間軸にある。長編がクロノジカルに語られているのに対して、短編は回想という形を取る。この語りの作用について考察するために、まずは、物語の粗筋を時間軸に沿ってまとめたい。

アメリカ南部の Pearl County に仲の良い独身の兄弟が住んでいる。兄 Andrew Tallon は畑作業に従事し、弟 Jim Tallon は製材所に勤めている。ある日、兄は一人の女性 Hallie Barrows を紹介され、一目で恋に落ちる。しばらくデートを重ねるが、ハリーは“harelip”（口唇裂）の唇を持つアンドリューを受け入れられない。むしろ、町の女性に人気者であるジムに関心を持つ。彼女は様々な方法でジムの気を引こうとするが、ジムは全く相手にしない。それに腹を立てたハリーは、アンドリュー（口唇裂のためうまく話せない）の真似をして、彼を町中の笑いものにするという復讐を企てる。アンドリューを侮辱するハリーを許せないジムは、それについてハリーを脅し暴力を振るってしまう。その直後、町中の予想を裏切って二人は結婚するのであった。結婚後、ジムとハリーとアンドリューの奇妙な共同生活が始まるが、決して長くは続かなかった。ジムは酒浸りになり、ハリーに暴力を振るい続ける。ジムのハリーへの暴力に耐えきれなくなったアンドリューは、ジムと揉み合いになり殺害してしまう。アンドリューはジムの遺体を自分の畑の一区画に埋める。町の人々はジムが妻を棄てて失踪したと考えるが、ジムから全く連絡が来ないこと、アンドリューの畑の一部が耕されずに放置されていることを不思議に思い、噂をし始める。町の噂が真相に近づく時、アンドリューは殺害を告白し、ジム殺害の罪で逮捕される。¹²

長編はアンドリューとハリー（マートル）が会おうところから語られており、3人の関係と南部社会の姿が時と共に変化していく様が克明に記録される。しかし、短編の時間軸はジムの失踪から半年後の殺害を告白する日に設定され、語りの視点は固定されず、すべては回想という形で語られる。いわ

ば読者はアンドリューの回想と共同体の視線(ゴシップ)を頼りにしながら、アンドリュー、ジム、ハリーの3人の関係を謎解きのように読み進めていくことになる。ここに二作品の大きな違いがある。

この謎解きのスタイル(推理小説的要素)こそ、南部社会の特徴とも言えるゴシップの性質でもあるが、マーチは、いわゆる「噂」から推理して楽しむ過程、を描き、それを作品の特徴として巧みに取り入れテーマとしていると言えるのではないだろうか。つまり、マーチは読者に、三人の奇妙な関係について「噂」を聞く聴衆として参加させ、しかしそれと同時に、アンドリューの回想によって共同体の噂が不完全であることを目撃させる。そして噂を聞く聴衆の枠から脱却した読者は、語り手(共同体)の視線以上の優越的な立場に立ち「新たな」噂の語り手になり得るのである。新たな「作者」になり得るという事実は、先に引用したシモンズの述べる“the reader's imagination”に繋がるだろう。本論では、この長編と異なる語りの形態に着目し、そこから読者の役割とマーチのゴシップ社会に対する見解に近づくことを目指したい。

1. ゴシップ：聴衆としての読者

アンドリューとジム、ハリーに一体何があったのか、読者が頼りにするのは共同体の視線とアンドリューの回想である。共同体の視線は信頼性に乏しいが、秘密をシェアするというスキャンダラスな雰囲気を提供する。そもそも、町の人々は、週末になると雑貨店に集合し“to miss none of the gossip”¹³という意気込みで情報交換し、彼らは噂する享楽にふけている。彼らにとってタロン家(町で名の通った家族)は様々な話題を提供してくれる興味深い家族であり、彼らの行動は、いわゆるテレビのワイドショー的なものである。従って、町の人々がタロン家の謎について語る時、読者は「噂を聞く一人の聞き手」として彼らのゴシップの低俗性が生み出す楽しみを共有していると言える。

まず、アンドリューとハリー、ジムとの恋愛の行方は恰好の話題の一つであった。テキストは次のように、町の人々がアンドリュー・タロンとハリー

の交際を笑いながら陰で噂していたことを明らかにしている。

“The whole county knew of the affair, and laughed about it, but they all predicted that Andrew’s silent persistence would triumph in the end.”
(25)

共同体はアンドリューの“affair”、“infatuation”(1)による“courtship”(1)を“with amused interest”(1)で見つめていた。従って、決して「家族的な男」(2)ではなく、「一人の女性に縛られるようなタイプの男性ではない」ジムの方が、ハリーと結婚した際には共同体の興奮は最高潮に達する。まるで「まさかジムもハリーに恋をしていたなんて！」(1)、「ハリーを奪われたアンドリューはジムと仲たがいでしてしまうわよ。」(1-2)と言わんばかりである。現代に喩えれば、噂に対する「書き込み」が「炎上」した状況であるだろう。しかし、仲違いをしたのはジムとハリーであった。結婚後まもなく酒浸りとなってジムは失踪する。このジムの失踪も、共同体に「興奮」と多大な関心を引き起こす。

Later, when he deserted his wife, the people at Gramlings store, gossiping, agreed they had expected that: Jim Tallon could never be tied down to any one woman, they said. Jim was simply not a family man. They discussed his derelictions in excited groups: The Tallons, with their drunkenness and their eccentricities, had again furnished material for gossip! (Underline is added, 2)

これらの共同体の視線には、彼らのワイドショー的のぞき見の視線と伝統的結婚観、タロン家に対する偏見が交錯している。ハリーを「愛」している素振りを見せていなかったジムの結婚と失踪は、そもそも結婚自体が失敗であり、そのような失敗はタロン家の奇抜さが引き起こしたものであるという、偏見が表れているのである。

また、共同体にとってもう一つの関心事は、アンドリューの畑の一区画に

耕されていない土地があることだった。パール・カウンティでも有数の肥沃な土地の一つ(11)に耕されずに放置された区画がある、という事実を町の人々が話題にしないわけではない。町の預言者的存在の Hildy は、“I had a dream about that field. Dreamed somebody had buried a pot of gold money there, and lost track of it... It had something to do with the Civil War.” (40) と述べ、「金」が埋まっているのかもしれないと「預言」するのである。

このような信頼性の薄い偏見に満ちた噂が共同体に溢れている一方で、読者は彼らの鋭い視線をも経験する。すぐに否定されるが、アンドリユーを疑う視線である。ジムが一週間分の賃金をもらわずにパーミングムへ失踪したこと、パーミングムに向かう列車で誰もジムに遭遇した者がいないことが明らかになってきた時、町の人々は「薄々」謎を究明する手掛かりがアンドリユーにあることを示唆するのである。

“Do you reckon Andrew really knows where Jim is, like some folks are saying?” asked Alice Barrascale.

There was a sharp sound of breath, and then silence, as Mrs. Barrascale put into words the half-formed thought in the minds of them all.

“People who say such things ought to be ashamed of themselves!” said Addie Wrenn. “Andrew and Jim were always devoted to each other.”

“Well,” said Theron Cornells, “remember Andrew was sparking Hallie first, and Jim beat his time.” (42)

「恥知らずな意見」として “the half-formed thought” はすぐに否定されるが、このような町の人々の会話を頼りに、読者は何らかの秘密があることを知り、聴衆の一人として謎解きを楽しむのである。

2. ゴシップの隙間を埋める情報：真相を知る読者

読者は共同体の噂から情報を得るとともに、アンドリユーの内面、さらに

はオムニシエントな語りによって、共同体が知り得ないことを知る。まず初めに、共同体が「予想できなかった」ジムの結婚への経緯について見てみたい。

ハリーを拒否し続けてきたジムが結婚に転じるのは、彼女が人前でアンドリューを侮辱したことに腹を立てたジムが、喧嘩を売ったことに端を発している。オムニシエントの語りは次のように提示する。

“How’s your loony brother you think so much of?” she asked.

“You dirty slut!” said Jim. ...“You Tallons think you’re better than other folks, don’t you?” ...“Well, I don’t care that for the whole passel of you!”

“You’re lying,” said Jim. “If I said the word, you’d crawl to me on your hands and knees.”...

“Iffen I hear you mock Andrew again, I’ll kill you, woman or no woman,” he said quietly.

“That harelip!” she said; “that –!”

Then Jim slapped her in the mouth sharply with his open palm....

“If I said ere a word, I could have you any way I want,” said Jim, his voice trembling.

“Yes,” she said.

As if awaiting this admission, Jim shoved her away and hit her squarely with his fist. Hallie fell against a pine tree and slid heavily to the ground. She lay silently on the carpet of pine needles, not moving. Instantly Jim was beside her, his arms about her, his body pressed against her. “Honey!–Haney, baby!–I wouldn’t hurt you for the world!” he pleaded. “Speak to me sweetheart...”

Hallie opened her eyes and pulled him to her. “I’ve got him now,” she thought triumphantly. (34-36)

ハリーに暴力を振るった後、結果的にハリーの望む形で性的関係を結び結婚

するが、これがジムの一時的な性的衝動に囚われた軽率な行為の結果であったのか、彼の意図的な行為であったのか、あるいはむしろ、ハリーによって誘導されたものであったのかは明確でない。結婚に至った経緯は極めて曖昧である。従って、読者は、それまでの3人の関係（ジムがハリーを避け、アンドリューを支えていたことなど）を踏まえ、さらにそれぞれの回想をヒントに理解する必要がある。

次に共同体が怪しんだジムの失踪と耕されない土地の問題であるが、それはアンドリューのジム殺害に対する回想とハリーとの会話で明らかとなる。以下の引用は、実際にジムを殺害するシーンのアンドリューの回想である。

Hallie crawled toward him, catching at his legs, but Jim drew back his foot and kicked at her savagely. Then, without thought, and without plan, Andrew caught up his brother, lifted him above his head, and hurled him against the floor. Jim got up, stunned and confused... “Good God!—Would hit me?—Would you hit me after all I done for you?”...he asked. Then he backed away, frightened before Andrew’s wrath. He stumbled, in his haste, across the bed, not seeing it, and the next instant Andrew’s hands were around his neck, bending his head backwards over the bed side. Jim twisted and struggled, throwing his legs high into the air, until there came a sound of bone breaking. (Underline is added, 50)

アンドリューはジムがハリーを激しく蹴った瞬間に「咄嗟に」「激怒して」ジムの殺害に至っていることがわかる。殺害のきっかけはジムのハリーへの暴力であった。アンドリューが“Why had Jim treated Hallie so brutally after he had married her? Andrew might have stood anything, except that. He had accepted his defeat at Hallie’s hands, and, in time, he might have stopped loving her: He would have been happy merely to have seen her happy!”

(48) と考えるように「ハリーが幸せであることが自分の幸せであった」のである。しかし読者は、さらに、“Jim drunken and cursing, brutal where his

father and Bradford had been merely playful; vicious where they had only been crude.” (48-49) とジムの姿に父と兄との類似を見ていることは見逃さないだろう。ジムのハリーへの暴力が暗示的にアンドリューに対する父（兄）の暴力であるかのようであり、兄弟間の殺人の背景に、彼と父との関係が潜在していることが汲み取れるのである。

共同体の謎、“unploughed patch”の下に埋められているものの正体については、読者は、ハリーとアンドリューの会話によって知る。それはもちろん「金」ではなく、ジムの遺体であった。

“They’re talking about the Delta Patch, too: They’re wondering why I didn’t plough all of it!”...

Hallie turned and opened the lid of the stove, throwing in the piece of wood. Then she set a kettle on to boil. “I told you not to leave that unploughed patch,” she said....

Andrew sat down on a chair and looked at the uneven floor which Hallie had recently scrubbed white. “I tried to plough it, Hallie!” he said humbly; “but I couldn’t do it.—I couldn’t plough over Jim!—I should a-knowed not to bury him face upward!” (47)

この会話によって、ハリーも“unploughed patch”に何が埋められているのかを知っており、彼女は証拠隠滅のために、そこを耕すようアンドリューに主張していたことがわかる。すなわち、これは、ジム殺害についてのアンドリューの告白が嘘であることを証明するものとなる。彼は町の人に、次のように告白する。

“Listen carefully to what I say,” he said. “Listen and tell the sheriff: I killed Jim and buried him in the Delta Patch.”...

“I killed Jim on the road one night over a debt of money,” said Andrew. Then he continued, cunningly: “Hallie ain’t in no way responsible: She thinks Jim run off to Birmingham and left her.”

(Underline is added, 53)

ジムの殺害はお金が原因であり、ハリーはこの件について何も知らないという。彼は全く嘘の告白をしており、ここに共同体が知らない事実が読者へののみ突きつけられることになる。

町の人々がたびたび口にするように、アンドリューとジムは非常に仲のよい兄弟であった。この殺害は突発的なものであったのか。起こる必然性を秘めたものであったのか。当然、共同体は、アンドリューの告白に従って、彼を逮捕するため保安官を派遣するが、アンドリューの殺害理由をどのように受け止めるのか。読者は、共同体のゴシップ気質がアンドリューの嘘を基に様々な推測をすることを予想する。アンドリューの嘘は「創造」を拒否するものか助長するものか。

3. 真相究明のための情報：ゴシップの創造者としての読者

共同体のゴシップを楽しみ、その隙間を埋める情報を得た読者は、事件の背景（動機）を探し求めようとする。彼らが謎を解き明かすために有効な鍵は、語り手として登場しないジムについてのアンドリューとハリーの回想である。初めにハリーの回想に迫りたい。彼女はジムの死を知らない姉 Effie との会話において、ジムとの関係を次のように振り返っている。

“I haven’t got any hard feelings against Jim,” said Hallie in a voice scarcely audible.

“It may sound silly of me to say it,” continued Effie, “but Jim always seemed sort of alone and pitiful to me, in spite of his good looks, and the way people made over him.” ...

“Mamma used to say that Jim didn’t care about anybody in the whole world except *Andrew!*” ...

“Jim never cared anything about me at all. I tried to think he did, but I

knew I was lying. I knew it the night he married me....”

“Oh, I’m sure you’re wrong,” said Effie. “If Jim hadn’t loved you, he wouldn’t a-wanted to marry you, would he?”

A puzzled expression came over Hallie’s face. ... “I never figgered out yet why Jim did marry me.” (Underline is added, 9)

エフィーは、「愛していなかったらあなたと結婚していなかったわよ」と共同体を支配する伝統的な「愛」について言及しているのに対しハリーは完全に否定する。結婚した時からジムの関心は自分に向いていなかったというのである。その一方で、ジムがアンドリューを誰よりも大切にしていたことについては、エフィーの「ジムはアンドリュー以外、誰にも関心がないかのようだわって、ママがよく言ってたのよ。」という言葉を追認するかのようになり、ハリーが“Effie, what made Jim care so much about Andrew?” (46)と言及するのは、示唆的である。さらに、このジムとアンドリューの関係は、最終的に、アンドリュー逮捕時に保安官に発したハリーの言葉に暗示的に表わされている。保安官が駆けつけた時、アンドリューはジムが埋まる土の上に這いつくばっていたのだが、ハリーは、「彼女自身、完全に理解できていないし、町の人々は全く理解できない」すなわち半ば無意識的な、次のような言葉を発している。“He’s lying on top of his brother, at last.... If Jim was alive, he’d like that, I think!” (55) この言葉は、ハリーがジムとアンドリューに「兄弟以上の」特別な関係を嗅ぎ取っていたことを示すものとなる。

次にアンドリューの回想に出て来るジムとの関係について考察してみたい。もともと共同体は、二人の関係がお互いを思いやるものであったことを明かしているが、それはアンドリューの回想シーンでも確認される。彼らが少年だった頃、その後、町を席卷することになる Hodge 家の兄弟が、タロン家の土地を買いに来た時のエピソードを見てみたい。ホッジ家の兄弟とタロン家の父 Lemuel と兄 Bradford は土地売買の交渉を成立させ、酒を酌み交わしていた。そこに帰宅したジムとアンドリューを父ラミュエルが見つけた。酒飲みの場の余興として、アンドリューを標的にする。彼はうまく言葉が話せないアンドリューに詩を吟唱させ、人前で笑いものにしたのだった。

その場を逃れたアンドリューとジムの会話である。

Jim walked toward him. He was trembling with rage. “Iffen he makes you do that again, I’m a-goin’ to kill him!” he said. ...“Pa don’t mean no harm,” he [Andrew] said. “He wouldn’t a-done it, iffен he hadn’t been drinkin’.” ...

“Why don’t you stay away from him?” demanded Jim. “Why don’t you keep out of his sight?”

“I don’t know,” said Andrew. ...“I’ll kill him!” said Jim passionately; “Him and Brad too!”...There was a warm feeling of blood in his throat, and around his heart. “So long as you and ma don’t laugh at me, I don’t keer what other people do!” he said in a voice scarcely audible. (16)

アンドリューにとって酒に酔って羽目を外す父と兄は相いれないもの、であり、唯一自分を理解してくれる存在は母とジムであった。

このように、アンドリューの回想するジムは、ハリーが回想するジムのアンドリューに対する思いを追認する、アンドリューを守り、保護する立場にいることを伝えるものであり、そこにアンドリューが心地よさを感じていることも明らかにしている。しかし、その一方で、口唇裂のアンドリューが明確に認識していないにしろ、ジムに対して羨望、嫉妬の眼差しを持って眺めていたことも事実である。それは、兄ブラッドフォードの15歳の誕生日のエピソードに表れている。兄ブラッドの誕生日プレゼントとして父は馬を贈る。大喜びのブラッドは弟たちにも馬に乗ることを許すが、その後はジムの独壇場であった。

He remembered Jim, a boy of six in those days, clinging to her sides with his lanky legs until the colt had bolted and thrown him into the watering trough. How they had all laughed! ... But Jim had insisted, despite his mother’s protests, on riding again, and that time he had remained seated. Jim had been the hero of the day: Indeed, he had

almost taken the birthday away from Brad, and made it his own. Everybody had praised Jim and made a lot over him.... (6)

アンドリューはブラッドの誕生日を自分のものであるかのように皆を虜にし、楽しませ、皆のヒーローとなるジム、皆に愛されるジムの姿を回想している。そこには、その場を蚊帳の外から見つめる兄アンドリューの無意識内の、ジムへの嫉妬心が垣間見られるだろう。

また、アンドリューが父について思い出す時、そこには兄とジムの姿がある。ジムはアンドリューとは違って父のお気に入りでもあった。“He remembered, also, his father, genial with corn whiskey, laughing and telling jokes, one arm resting around Bradford and the other around Jim.” (6) 父と不和であるアンドリューにとって、同じ息子であり一つしか年齢が変わらないジムのみが受け入れられているという事実は、潜在的に嫉妬心を募らせていたことが推測されるのである。

このように、ジムへの嫉妬、羨望の眼差しが、アンドリューの子どもの頃から蓄積された無意識内のものであったと考える時、それがジム殺害に何らかの影響を与えたと言っても無理はないだろう。実際、罪意識に苛まれたアンドリューの内面は、ジムに対する妬みが渦巻いている。

These recurring thoughts kept coming up from the core of his being to trouble him. He tried to banish them, to think of other things, but his mind turned, inevitably, to himself... Why should nature have cursed him with a deformity which would make the woman he was destined to love turn away from him, if, as it appeared, the sole plan of nature was irrational fertility?... And why, in turn, should Hallie desire Jim?—What was there different between them? They were both men. They were, actually, the same flesh and the same blood.... (52)

なぜ同じ兄弟なのにハリーが選んだのはジムなのか、自分の口はなぜ人と違うのか、彼の中に渦巻くつぶやきは、アンドリューの内面に潜む悪であり絶

望であるだろう。

読者はこれらのハリーとアンドリューの回想から、ジム、ハリー、アンドリューの関係を再構築する。ジムのアンドリューに対する特別な思い、アンドリューの父と弟に対する複雑な思いなど、様々な視点から読み解き想像することは可能である。しかし、どのように構築しても、それは、新たな「ゴシップ」を作成するに過ぎないという現実を突きつけられるかのようにテキストは曖昧である。ゴシップは、アンドリューが述べるように、生み出されては書き換えられるが、永遠に“hallow”性を埋めることはできない。

Before he could distinguish individual words, he heard a confused babble of talk from within the store, talk so hollow, and so sourceless, that it sounded as if it came from people living in the center of the earth.
(38)

アンドリューの逮捕時の共同体への嘘は、共同体の「噂」を助長するものであっても、真実に達することを拒否するものでもある。マーチは、アンドリューを通して、南部のゴシップ社会の脆弱さ、傲慢さ、空虚さなどを映し出し、問題意識を投げかけているのではないか。読者に対しても、ゴシップで成り立つ南部社会に巻き込みながら、そこから脱却させ、真実に迫ることができるかのような錯覚を与える。しかし、作品自体が含む多くの曖昧性によって、新たな創造を拒絶し、決して断定させてはくれない頑なさを示すのである。“The Unploughed Patch”には、マーチの「断定」することを否定する挑戦的な姿勢が示されていると言えるのではないか。物語の行方を支配しようとする目論見を持つや否やテキストはすり抜けていく、そのような作品である。

4. 現代の読者

“The Unploughed Patch”における、主人公が行方不明（or 死）で始まるミステリアスなゴシック性と、ゴシップ的共同体の特徴はフォークナーの“A

Rose for Emily” (1930) との酷似を感じさせる。実際、両作品がほぼ同時期に制作され、両者ともに南部の閉鎖社会を描き、また、そこで起きた男女の関係に基づく不思議な出来事（殺人事件）を扱っているのは興味深い。両者に共通なのは、南部の「のぞき見的視線」による物語の創造であり、それに対する作家の、あるいは創造される者たちの拒絶の姿勢であるだろう。

作品は80年以上も前のものであるが、このような社会の在り方、他人に対するスキャンダラスな視線とそれによる物語の創造は、現在も全く変わらない。SNSの発達により、情報の拡散スピード・範囲が格段に上がり、地域という枠を超えて様々なコミュニティが形成されており、しかしながら、その中で南部に見られた「噂社会」は形を変えて存在している。まさにそれは、近代化し科学技術の進歩によって簡単に地域も国のボーダーも越えられる便利さの裏にある人間の危うさである。人間の結びつきが多様化し、情報が即座に世界規模で拡散される今だからこそ、今作品は、現代人にとっても情報の取得の仕方、解釈の仕方への警告として、普遍性を持つだろう。

マーチは人間を批判的に客観的に観察した。皮肉な視線で人間を見つめ、その愚かさや孤独を描き続けた作家である。南部のゴシップ社会に生きる登場人物たちは、マーチによって普遍性を持ち、現代人の鏡として生き続ける。人間は孤独であり、他人の理解は決して及ばない。

(註)

¹ *Midland*, 16号、1930年発行。

² *Pagany*, 2号、1931年発行。

³ *Midland*, 18号、1931年発行。

⁴ 雑誌に発表されることはなく、最初に発表されたのは、短編集 *The Little Wife and Other Stories* (1935年) である。

⁵ *Story*, 2号、1932年発行。

⁶ *Pagany*, 3号、1932年発行。

⁷ 1951年の *Manchester Guardian* 誌の “William Faulkner: The Road to Stockholm” でフォークナーの現状について言及する中で書かれたものである。(*William March: An Annotated Checklist*, p80参照。)

⁸ 1954年の *Manchester Guardian* 誌の “William March: A Trial Balance” の中で述べられて

いる。(William March: An Annotated Checklist, p81参照。)

⁹ *The Two World of William March (TWWM)*, p122。

¹⁰ “Some in Addition”の中でゴーイングは、“But this first version of a twice-told tale deserves to be remembered. For uncompromising realistic tragedy it stands among March’s most memorable tales,...” (88)と指摘し、“William March: Regional Perspective and Beyond”では、“In many ways the novelette in *Pagany* seems better than the expanded work.” (437)と述べる。

¹¹ *TWWM*, p123。

¹² 長編と短編の違いとして、主人公の女性の名や性格が挙げられる。*The Tallons*では女性の名前はMyrtle Bickerstaffといい、妊娠しておらず、ジム殺害に積極的に関与するなど、ハリーとの相違点は大きい。

¹³ “The Unploughed Patch.” p37。以後、テキストの引用は本文中に頁数のみを記す。

(参考文献)

Going, William Thornbury. *Essays on Alabama Literature*. Studies in the Humanities. Vol. 4. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1975.

— “William March: Regional Perspective and Beyond.” *Papers on Language & Literature* 13. 4 (1977): 430-443.

Hyman, Stanley Edgar. “Alabama Faulkner.” *New Republic*, 108 (1943): 187-188.

March, William. *The Tallons*. New York: Random House, 1936.

— “The Unploughed Patch.” *Pagany: A Native Quarterly*, 4 (1932): 1-55.

— *The Little Wife and Other Stories*. New York: Harrison Smith and Robert Haas, 1935.

Simmonds, Roy S. *The Two Worlds of William March*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1984.

— *William March: An Annotated Checklist*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1988.